

# 老年看護学実習での高齢者とのコミュニケーションにおける教育課題

榎本 朋子, 須田 厚子, 田邊美津子

## A Problem of Educational Support in Communication with Elderly People During Clinical Practicum

Tomoko MASUMOTO, Atsuko SUDA and Mitsuko TANABE

キーワード：老年看護学，コミュニケーション，教育課題

### 概 要

本研究では、看護学生の実習中における高齢者とのコミュニケーションに焦点をあてて、全領域の臨地実習終了後の調査をまとめた。その結果、看護学生が高齢者とのコミュニケーションにおいて工夫した内容で最も多かったのは「接し方」であり、『患者の目線で話す』『挨拶をきちんとする』等、基本的コミュニケーション技術を使いながら高齢者とかわっていた。実習指導者や教員に指導を希望する内容としては、「自虐的な言葉や『死にたい』などといわれた時、どうすればよいか」等の具体的な対処方法や、「信頼関係の築き方」「敬語の使い方」「問の取り方」が多かった。以上の事から、今後は看護学生に対して、個別に患者とのかかわり方についての継続的支援を行いながら、基本的コミュニケーション方法の具体的指導を強化する課題を得た。

### 1. 緒 言

老年看護学教育を行う上では、学生の持つ高齢者に対するイメージや老年観は、非常に重要となるといわれている<sup>1-3)</sup>。大谷ら<sup>4)</sup>は、老人イメージと形成要因に関する調査研究をする中で、老年観は、老年看護にかかわる際の看護の姿勢の源であり、その人の枠組みを形成し、それがその人の行動を規制し看護ケアの質、援助に影響するとしている。

そこで私たちは、老年観の育成を目的として、高齢者疑似体験やレクリエーションなどを取り入れて教育をすすめてきた。その効果をみるために、本学での老年看護学のカリキュラムに沿った2年次開始時から2年次後期終了時までの講義・演習・実習における看護学生の高齢者イメージの変化をまとめた<sup>5)</sup>。その結果、看護学生は高齢者とのコミュニケーションが思うように行えず、「コミュニケーションや関係作りが困難」と感じ、高齢者に対してマイナスイメージを持つ学生がいることが明らかとなった。他の研究<sup>6,7)</sup>でも、コミュ

ニケーションが老年看護学実習において学生が最も「困った」看護援助であり、また、看護師を対象とした調査<sup>8)</sup>でも同様の結果が出ている。

老年看護学の分野では、学生は高齢者の持つ認知障害や聴力・視力障害などにより、よりコミュニケーションが困難になると考えられるが、田村<sup>9)</sup>は、学生自身の問題をあげ、生活体験に乏しく、さらにコミュニケーションを苦手とし、人とのかかわりを避ける者が増えているとしている。実際に認知症高齢者と接する事に困惑を見せる学生に対して、その事を踏まえた上で、どのように介入し指導していくべきなのか検討が必要であると考えた。臨地実習は期間が限られており、コミュニケーションだけではなく、経過や病態に応じた個々の看護過程を展開できることを目標としている。目標を達成するためには、私達教員は、学習の早い時期から看護学生が高齢者とコミュニケーションを十分にとれるように、高齢者への理解を促すだけでなく、看護学生に対してより実践的な教育や指導が必要になっていると考える。

そこで本研究では、看護学生の臨地実習中の高齢者に対するコミュニケーションに焦点をあてて、看護学生自身の対処方法や指導を希望する実態をより詳しく調査を行い、それに対する課題を検討したのでここに

(平成19年10月10日受理)

川崎医療短期大学 看護科

Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

報告する。

## 2. 研究方法

### 1) 用語の定義

「コミュニケーションとは、一定の意味内容を記号 sign を媒介として、送り手である個体から受け手である他の個体に情報を伝える過程である<sup>10)</sup>」とする。

### 2) 研究対象

A短期大学看護科32期生（平成18年度卒）87名中、82名に質問紙を配布し、回収した66名（回収率80.4%）を対象とした。

### 3) 研究期間

2007年3月13日～3月15日である。

### 4) データ収集方法

無記名による自記式質問紙にて調査を実施した。質問紙の内容は(1)現在（卒業時）の高齢者のイメージ、(2)臨地実習で70歳以上の高齢者の受け持ち経験の有無とその人数、(3)高齢者とのコミュニケーションで工夫したこと（19項目）、(4)自分なりに高齢者とのコミュニケーションで工夫したこと、(5)実習中に、実習指導者や教員からコミュニケーションについて指導を受けたかった項目（11項目）、(6)その他、困ったことや指導を希望することである。

質問紙のコミュニケーションの項目の内容については、A短期大学で使用している教科書<sup>11,12)</sup>及び、齋藤ら<sup>13~15)</sup>の高齢者とのコミュニケーションに関する文献等を参考にして研究者らが作成した。今回は、コミュニケーションに焦点を当ててまとめるため、現在の高齢者イメージについては分析しない。

### 5) 分析方法

統計解析には SPSS 14.0J for Windows を使用した。

#### (1) 高齢者とのコミュニケーションで工夫したこと

① 各19項目については、項目の回答を「しなかった」を1点とし、「よくした」を5点として点数化し、平均値を算出した。得点が高い方がよく使用したコミュニケーション技術を示す。

② 自分なりにコミュニケーションで工夫したこと  
の自由記述については、同様の内容のものをまとめて、その傾向をみた。

#### (2) 実習指導者や教員からコミュニケーションについて指導を受けたかったこと

① 11項目については単純集計を行った。

② 自由記述に関しては、内容を類似したものでま

とめた。

### 6) 倫理的配慮

研究趣旨と目的を、口頭と文書で説明し、研究への参加は自由であること、参加しないことへの不利益はないことを説明し、了解を得たものに配布した。また、質問紙は無記名とし、個人を特定しないこと、研究以外の目的では使用しないことを約束した。回収に関しては、学内に投函箱を設置し、一定期間を設けて投函してもらった。

### 7) 老年看護学実習の概要

A短期大学の老年看護学実習の目的・目標は表1に示す。

看護学生は、老年看護学Ⅱの講義や演習において、高齢者に特徴的な視覚障害、聴覚障害、失語症、認知症の患者に対する看護援助としてのコミュニケーション方法については学習している。

3年次の「老年看護学実習」は、4単位180時間であり、大学病院で病棟実習（3週間）と、介護老人福祉施設、通所介護デイサービスセンターで実習（2週間）を行っている。コミュニケーションに関しては、これらを実施していく上での基本的な能力であり、机上で身につけた知識を用いながら高齢者とのかかわりの中で、実践・応用していくものであると位置づけている。

## 3. 結果

### 1) 臨地実習での70歳以上の受持ち患者数

臨地実習中に受け持った患者の中で70歳以上の患者

表1 A短期大学看護科の老年看護学実習の目的・目標

<p><b>【目的】</b> 老年期にある人々のニーズを医療・保健・福祉の各側面から充足した援助ができるよう査定し、生活史による個人差・老化によるさまざまな機能変化などの相互関連を理解した上で、現在の健康レベルを評価後、問題解決に必要な看護を学習する。</p> <p><b>【目標】</b> 1) 老年者の身体的、心理的、社会的特徴について説明できる。 2) 生理的変化の実際につれ、病的老化との違いや個人差の大きさ、老化による様々な身体的・心理的・社会的変化などの相互関連を理解する。 3) 老年者の日常生活行動の自立性を高めるように援助ができる。 4) 老年者をとりまく、ソーシャルサポートシステムについて、概略が説明できる。 5) 老年者の生活史を知り、信条・信念・価値観を尊重した行動がとれる。 6) 老年者の死の受け止め方と、それへの対応について学ぶ。 7) 老年者の在宅看護へむけた援助方法について学ぶ。 8) 老年者をとりまく保健・医療・福祉の連携について学ぶ。</p>
--

を何名受け持ったかを尋ねた所、1人を受け持ったと答えた看護学生は7名、2人は20名、3人は21名、4人は17名、無記入は1名であり、受け持っていない学生はいなかった。

2) コミュニケーションで工夫したことについて

コミュニケーションで工夫した項目の得点の結果を表2に示す。

点数が4点以上であり、学生がコミュニケーションの方法としてよく実施していたのは、「笑顔」4.72、「相槌をうつ」4.67、「ゆっくり話す」4.58、「言葉遣いに気をつける」4.53、「はっきり話す」4.40、「見守る」4.37、「分かりやすい言葉で伝える」4.34であった。点数が3点以下であったのは、「文字にして伝える」2.48であった。

3) 自分なりにコミュニケーションで工夫したことについて

自分なりにコミュニケーションで工夫したことの自由記述の結果は表3に示す。

回答数は29名であった。工夫した内容で最も多かったのが「接し方」であり、『患者の目線で話す』『挨拶をきちんとする』『患者の趣味や好きなことに合わせてコミュニケーションのとり方を変える』などであった。

表2 高齢者とのコミュニケーションで工夫したこと n=66

項目	平均値 (標準偏差)
笑顔	4.72 (0.45)
相槌をうつ	4.67 (0.56)
ゆっくり話す	4.58 (0.66)
言葉遣いに気をつける	4.53 (0.62)
はっきり話す	4.40 (0.77)
見守る	4.37 (0.76)
分かりやすい言葉で伝える	4.34 (0.67)
信頼関係を築く	4.29 (0.58)
頑張りを認める	4.20 (0.73)
相手の気遣いを感じ取る	4.20 (0.73)
表情を読み取る	4.19 (0.71)
家族の話をする	4.00 (0.84)
生活史を理解する	4.00 (0.76)
体に触れる	3.85 (0.83)
黙って話を聴く	3.73 (0.93)
相手が何について言おうとしているの明らかにする	3.72 (0.74)
自分の思いを言葉に出す	3.55 (0.77)
低い声で話す	3.45 (1.10)
文字にして伝える	2.48 (1.08)

表3 学生自身がコミュニケーションで工夫したこと

n=29

記述内容	カテゴリー
言葉遣いに気をつけた。相手の前に立つ。挨拶をきちんとする。その方の名前を呼んで話しかける。共通の話題を探す。訴えの内容、パターンの把握をしていく。ひとつのことから話を膨らませるようにした。患者の趣味や好きなことにあわせてコミュニケーションのとり方を変えた。何度も同じことを話す人に、何度も聞き返さない。話を聞く際にも臥床されている患者に目線を合わせ、常に接していた。場所を工夫。座る位置、目線。患者の目線で話す。視線を合わせて会話する。笑顔を絶やさずこした。日ごとの変化を伝え、業務的な意味でバイタルを計っているのではなく、「毎日あなたを見てますよ」ということが伝わるように接した。	接し方
1度に話をしてくださると長時間続く事が多かったので、その方の時間を大切にす為、(疲労しないよう)話を切り上げた。相手の感情を推測して、そばにいる時間を調節する。日中よく眠られている方が多くておきている時間を考えて訪室した。	時間を考慮する
興味のあることを質問し会話しやすくする。相手の興味のある話を引き出す。高齢者の方の趣味の話などをする。相手の話を引き出す。	興味のある話題を探す
認知症で昼夜逆転のある患者と散歩に行き、窓の外が明るいということを伝え「今は昼である」ということをお伝えした。散歩に行った。	散歩に行く
折り紙や色画用紙でカレンダーや小物を作り、持って行った。折り紙などのレクリエーションを取り入れた。	道具を使う
さまざまな話をして多くの時間を共有する。	時間を共有する
無視されたり、話をしてくれなかったりしても落ち込まない。	自分の態度
拘縮に気をつけて他動運動しながら。	看護援助を行う

その他に「時間を考慮する」「興味のある話題を探す」「散歩に行く」「道具を使う」「時間を共有する」「自分の態度」「看護援助を行いながら」の合わせて8カテゴリーがあった。

#### 4) 指導を希望する項目

臨地実習中に実習指導者や教員に指導を希望する項目については表4に示す。

学生が実習中に患者とのコミュニケーションを行う上で、特に指導を希望する内容として、「自虐的な言葉や『死にたい』などといわれた時、どうしたらよいか」が44名(66.7%)、「疾患や病名について聞かれた時、どう答えたらいいか」が34名(51.5%)、「認知症のある方との接し方」が28名(42.4%)、「どんな話をすればよいか聞きたい」が23名(34.8%)であった。

その他の希望する指導内容や困ったことに関しては、「認知障害が重いと話をしている、その方の話が止まらなくなった時などに相手を傷つけない話の切り上げ方、相手からの離れ方」「認知症の方で相手側から何も発言がない時、何を話したらいいかわからず困った。」など、認知症の患者とのコミュニケーションに関するものや、「コミュニケーションが上手く取れない方に対する具体的な対応の仕方。頭では相槌や笑顔、非言語的なコミュニケーションを行うとわかっている、いざ本人を前にすると行動に出る事ができない」など、具体的なコミュニケーションの方法の指導を希望するものや、「実習の中で『死にたい』という言葉ばかりでその人と信頼関係を築いても会話の内容、話題をいくら出しても困った。」「慢性的な疼痛があり、難

聴のある患者さん。話しかけても、さすっても変化がない。ただ、隣にいただけで何もできない自分がはがゆかったし、いつも苦痛に顔をゆがめている人とずっと一緒にいる私自身もしんどかった。」など、個性性に合わせた患者とのコミュニケーションにおいて困難と感じた時の内容があった。

## 4. 考 察

### 1) 臨地実習での受持ち人数について

A短期大学では、特定機能病院である附属病院においてほとんどの実習を実施している。臨地実習は7領域で実施されており、そのうち小児看護学及び母性看護学をのぞいた、5領域において、最低でも5人の患者を受け持つ。今回、受け持った患者数の調査結果をみると、1人から4人までと差があり、70歳以上の高齢者を受け持つ機会は実習の内容により個人差があると考えられる。しかし、3～4人と答えた学生も多く、老年看護学領域以外でも高齢者を受け持つ機会は多いといえる。

### 2) コミュニケーションをとる上での工夫点

高齢者とのコミュニケーションをとる上で工夫したこととしては、「笑顔」「相槌をうつ」「ゆっくり話す」などの方法をほとんどの看護学生が実施していた。このことから、会話ができる患者とは基礎看護学で知識として身に着けたコミュニケーション方法を使っているのかかわりを実施できていると考える。また、学生自身が自分なりに工夫したこととして、相手との「接し方」「時間を考慮する」「興味のある話題を探す」などがあり、相手のことを考慮した工夫ができていた。このことは、老年看護学で学習する高齢者自身が持つコミュニケーション障害を考えると、学生自らが相手に応じて工夫し、高齢者との関係作りに取り組んでいたと考える。

「文字にして伝える」は、聴覚障害のある方とのコミュニケーションにおいては必要不可欠であるが、今回は聴覚障害のある方を受け持つ機会が少なかったため、経験できなかった学生が多かったと考える。

### 3) 臨地実習中に実習指導者や教員に指導を希望する項目について

実習中に実習指導者や教員に指導を希望する項目では、患者が「自虐的な言葉や『死にたい』などと言った時」に困難を感じ、特に指導を希望する結果が明らかとなった。また、痛みや苦痛を訴える患者とのかわりの中で自分の無力さを感じている学生もいた。車

表4 実習中のコミュニケーションに関する指導要望項目

n=66

教員への指導の要望	人数(%)
自虐的な言葉や「死にたい」などといわれたときどうしたらよいか	44 (66.7)
疾患や病名について聞かれた時、どう答えたらいいか	34 (51.5)
認知症のある方との接し方	28 (42.4)
どんな話をすればよいか聞きたい	23 (34.8)
質問された時どう答えたらいいか	15 (22.7)
どうしたら信頼関係が築けるのか	15 (22.7)
相手の話の聞き方を見せてほしい	13 (19.7)
問の取り方	12 (18.2)
敬語の使い方について聞きたい	6 (9.1)
いつ話をすればよいか聞きたい	4 (6.1)
特にない	4 (6.1)

田<sup>16)</sup>は老年看護学実習前後の老人に対する感情の変化とその感情に影響を及ぼす要因として、「学生は患者に拒否的態度、マイナスのイメージの言動が見られると、意識的にかかわりを持たないように距離を置く傾向にある」と述べている。疾患を持ち入院治療を受けている患者にこのような態度や、言動があるのは特別なことではない。また、伊藤ら<sup>17)</sup>は、患者の言動の受容、受容的態度の実践、言語的コミュニケーションの課題があるとしながらも、拒否行動・混乱状態にある患者を受け持った看護学生のかかわりを分析すると、「会話内容の記録を促すこと」で、学生は患者の行動には患者なりの理由があることを言語的に探り、「誠実性」「傾聴」「側に存在すること」を経験的に学んだとしている。このことから教員は、学生が患者の言動からコミュニケーションを回避することなく、会話内容の記録やプロセスレコードのような学習方法を利用しながら、患者とよりかかわりを持つとする姿勢や、どうかかわるかを継続して支援していく必要があると考える。また、認知症高齢者とのコミュニケーションに関して困ったと感じている学生が多かった。臨地実習の中の介護老人福祉施設では認知症高齢者を受け持たせていただくことが多い。現在、事前学習で認知症の患者とのコミュニケーションについて学習し、また実習初日にはオリエンテーションを交えて、認知症高齢者と相手のペースで目線を合わせながら、そばにやさせていただく時間を大切にしようなかかわり方の指導をしている。実習は短期間ではあるが、最終の記録を見ると、学生によっては認知症高齢者の方と分かり合えた、受け入れられたという感覚を得て実習を終わる者もいる。今後は、その感覚の差に注目しながら、看護学生が認知症高齢者の反応に何を困難と感じ、どう対処を実施したのか、また、それに対する反応がどうであったのかなど、看護学生に認識させながら、コミュニケーションの実際について理解を深め、さらに非言語的コミュニケーション等を使用したかかわりを実施できるように積極的に指導援助する必要がある。

#### 4) ま と め

コミュニケーションは、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」<sup>18)</sup>において、看護師教育(3年課程)の基礎分野での教育内容の充実課題にもあげられており、相手を知り、相手とかかわろうとするコミュニケーションの技術や姿勢は看護では欠かせない。本調査では、看護学生は基本的コミュニケーション技術を使いながら、自ら工夫して高齢者とかかわっていたこと

が明らかとなった。しかし、教員や臨地実習指導者に指導を希望する内容として、「どうしたら信頼関係が築けるのか」「質問された時どう答えたらいいのか」「相手の話の聞き方を見せてほしい」「問の取り方」「敬語の使い方について聞きたい」など、基本的なコミュニケーション方法に関するものも多かった。Kotecki<sup>19)</sup>は、臨地実習でのコミュニケーション技術に対する教育は十分でない指摘しており、高崎<sup>20)</sup>が述べる「人間関係形成のプロセスとしての看護援助」を考えると、老年看護学実習では、看護学生のコミュニケーション手段としての看護技術教育をより勧める必要があると考える。

## 5. 結 論

今回はコミュニケーションに焦点をあてて調査を実施し、その結果次のことが明らかとなった。

1. 看護学生がコミュニケーションの方法として工夫した内容で最も多かったのは「接し方」であり、『患者の目線で話す』『挨拶をきちんとする』『患者の趣味や好きなことに合わせてコミュニケーションのとり方を変える』などであった。
2. 学生が患者とのコミュニケーションを行う上で、特に指導を希望する内容として、「自虐的な言葉や『死にたい』などといわれた時、どうしたらよいか」「疾患や病名について聞かれた時、どう答えたらよいか」「認知症のある方との接し方」「どんな話をすればよいか聞きたい」が多かった。

以上の事から、今後は看護学生に対して、個別に患者とかかわり方についての継続的支援を行いながら、基本的コミュニケーション方法の具体的指導を強化する教育課題を得た。

## 6. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力頂いた看護学生、教職員の皆様方には深く感謝いたします。

## 7. 文 献

- 1) 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子: 高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化—看護学生の高齢者イメージの自由記述の内容分析から—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要11: 119—126, 2003.
- 2) 岩鶴早苗, 天津榮子, 水田真由美, 水主千鶴子: 看護学生の高齢者観育成に関する研究(第2報)—3年間を縦断的にみる高齢者観の分析—, 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要4: 37—46, 2001.

- 3) 名倉順子, 天下井深雪: 老年観育成の試み～高齢者に対するイメージの変化～, 神奈川県立平塚看護専門学校紀要 11: 17-23, 2005.
- 4) 大谷英子, 松木光子: 老人イメージと形成要因に関する調査研究(1), 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会誌18(4): 25-37, 1995.
- 5) 須田厚子, 榎本朋子: 看護学生の講義・演習・実習による高齢者イメージの変化, 川崎医療短期大学紀要26: 29-36, 2006.
- 6) 服部紀子, 青木律子, 安藤邑恵: 老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析—「飲食」への援助に焦点をあてて—, 日本看護学会論文集 看護教育36: 105-107, 2005.
- 7) 布佐麻里子: 臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ, 日本看護科学学会誌19(2): 78-86, 1999.
- 8) 湯浅美千代, 吉田千文, 野口美和子, 佐藤禮子, 内山順子: 大学病院等高度先進医療を行う病院において高齢者をケアする上で看護婦が抱く困難間について, 千葉大学看護学部紀要19: 117-124, 1997.
- 9) 田村正枝: 対話で創る看護—ともに成長しつづけるために—, 日本看護学教育学会13(2): 45-52, 2003.
- 10) 氏家幸子: コミュニケーション, 「基礎看護技術 I」氏家幸子, 阿曾洋子, 井上智子著, 第6版, 東京: 医学書院, p. 3, 2006.
- 11) 前掲10), pp. 3-28.
- 12) 山田律子: 認知症高齢者の看護, 「系統看護学講座専門分野 20 老年看護学」中島紀恵子著者代表, 第6版, 東京: 医学書院, p. 272, 2005.
- 13) 齋藤美華, 森鍵祐子, 川原礼子: 教員が高齢者役を演じるロールプレイング演習における学生の学び—高齢者とその家族を対象とした外来看護師の役割に焦点を当てて—, 老年看護学11(1): 53-61, 2006.
- 14) 宮地真澄, 大町弥生, 平良陽子: 老年看護学実習における学生の高齢者理解—ケーススタディの内容分析から—, 藍野学院紀要19: 43-49, 2005.
- 15) 太湯好子: 患者の心に寄り添う聞き方・話し方 ケアに生かすコミュニケーション, 東京: メヂカルフレンド社, pp. 52-58, 2002.
- 16) 車田純子: 老年看護学実習前後の老人に対する感情の変化とその感情に影響を及ぼす要因, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録29: 71-78, 2004.
- 17) 伊藤道子, 鳴海喜代子: 拒否行動・混乱状態にある患者を受け持った看護学生の関わりの分析—教育的サポートの考察—, 日本看護学会論文集 老年看護33: 208-210, 2003.
- 18) 厚生労働省: 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 平成19年4月.
- 19) Kotecki CN: Baccalaureate nursing students' communication process in the clinical setting, J. Nurs. Educ. 41(2): 61-68, 2002.
- 20) 高崎絹子: 老年看護学の特質と研究の意義, 「最新老年看護学」高崎絹子, 水谷信子, 水野敏子, 高山成子編, 東京: 日本看護協会出版会, pp. 3-38, 2005.